して使用し，実際に教室で使用するには，もう少し形のちがった，内容的にも興味の持てるものにした方がよいと思う。あるいは，*Spoken Thai* などで一応基礎的なタイ語をやった者が整理のために本書を使用するのなら，大いに有用であろう。なお，かなり誤植が多く，急いで製本した様な印象を受ける。（桂満希郎）

David D. Thomas et al. *Mon-Khmer Studies I.* Saigon: 1964. 163p.

Linguistic Circle of Saigon といっても一般には知られていないが，本書によると，南ベトナムの Saigon 大学と米国の Summer Institute of Linguistics のメンバーによる研究会であるらしい。本書は，その研究会が1963年秋にユエ（Hue）で行なわれた際に読まれた原稿をまとめた論文集である。著者は，編者として Introduction を書いている米国 North Dakota 大学の David D. Thomas を除いては，John and Elizabeth Banker, John and Carolyn Miller, Richard and Saundra Watson というこれまでほとんど無名であった人たちばかりである。

本書で扱われている言語は，南ベトナムで話されている3つの少数民族の言語，すなわち Bahnar 語，Brou 語，Pacoh 語であって，いずれも東部モンクメル系統に属する。この系統の言語は，ラオス，ベトナム，カンボジアに様々な種類が分布しており，比較言語学的にクメル語を考えるうえで欠かせないものであるにもかかわらず，事実上ほとんど未開拓のままであった。その意味で本書の出現はまことに喜ばしいことに違いない。ことに，このうちの Brou 語と Pacoh 語は今まで単にその名が知られていただけであった。

もっとも本書からはこれら3つの言語の断片しかわからない。各論文とも記述的な研究であるが，短い論文であるうえ，取上げた問題も方法も異なっていて，全体としてひとつの言語の構造がわかるという体裁のものではないからである。すなわち，Bahnar 語については，(1) Clause Paradigm, (2) Affixation, (3) Reduplication, Brou 語については，(1) Word Classes, (2) Substantive Phrase, Pacoh 語については，(1) Pronouns, (2) Phonemes が，それぞれ述べられている。

本書の主眼とする所はむしろ様々な記述方法の適用例の提示ということにあるようである。たとえば，Bahnar 語の Clause Paradigm には transformational battery が，Brou 語の Substantive Phrase には tagmemic approach が用いられるという具合に。しかしこの場合，battery とか tagmemic, tagmatic とかいった術語に対して，十分な説明や定義がほしいものである。これらはまだあまり熟していなかったり，学者によって用法が同じでないものだからである。

比較言語学的な論文としては Thomas によるモン・クメル語比較研究の展望があるのみであるが，まさにその中で述べられているように，この系統の言語の比較研究を困難にしている最大の原因は音素論的基礎の欠如である。それは本書の対象となっている言語についてもあてはまることである。

ともあれ，Schmidt より半世紀以上もたった今日ようやく，しかしここ数年来にわかに，モン・クメル諸語の研究が活発になったことは事実であって，本書もまたそのひとつの現われなのであろう。（三谷恭之）

Udom Warotamasikkhadit. *Thai Syntax: An Outline.* A Dissertation Presented to the Faculty of the Graduate School of the University of Texas. Bangkok: College of Education Prasarnmitr, 1963. v+70p.

タイ人によって書かれたタイ語に関する本というのは，一口に言えば，いかにして正しいタイ語を使用するかという規範的なものがほとんどであった。しかし，最近になって，タイ人の若い学者で，主としてアメリカの記述言語学の方法を身につけ，それでもってタイ語を記述説明して行こうという人達が出て来ている。本書はその代表的なものといえるであろう。したがって，本書はタイ語の規範を示すものでもないし，これでもってタイ語を勉強しようとしても全く無駄であろう。言いかえれば，「いかにタイ語を使用すべきか？」ということは一応別にして，「タイ語とはどういう構造の言語か？」ということを明らかにしようとするものである。

アメリカの構造言語学においても，従来の方法では説明し切れなかった多くの点を説明することのできる新しい言語理論として現れたのが Noam Chomsky, Emmon Back 等を中心とする Transformation の

理論であるが，本書はこの理論に基ずいてタイ語のSyntaxを記述するものである。全体をPhrase structure, Generalized grammatical transformation, Optional grammatical transformation, Obligatory grammatical transformationに分けて説明しているけれども，これらはすべて置きかえのルールより成り，最後まで読み通してはじめて，タイ語のSyntax構造が明らかになると言った性格の本である。頁数も余り多くなく，複雑なSyntax構造を非常に簡潔に要領よく記述していると言えるが，Transformational analysisの理論について予備知識を持ったうえで読まなければ，とても理解できないのではないかと思う。

もちろん，私は本書が完全なものだとは思わないし，むしろキメが荒いと思うくらいであるが，タイ人の手によってこう言った研究がなされていると言うことは，喜ばしいことであると同時に，我々外国の研究者にとっては，驚異に値することだと思う。とにかく，タイ人はタイ語がわかるのであるから，彼らが本腰を入れてこういう研究を始めたら，とても太刀打ちできなくなるのではないかと思われる。Transformationの理論自体が，未だ完成したものだとは言えないけれども，色々な面で大きな成果を上げていることは事実である。最近，外国の研究者に対するタイ語教授，あるいはタイ人に対する英語教授等の必要が大きくなりつつあるが，こういった実用的な面での効果をあげるためにも，本書の様な基礎的な研究が必要であると私は思う。先にも述べた様に，本書が完ぺきなものだというつもりはないが，こういった研究が地道に続けられ，つねに補正されて行くということは，タイ語研究にとって喜ぶべきことだと思う。　（桂満希郎）

Thawit Suphaphon. *Prawatsat Thai-Khom-Khamen.* Bangkok: 1965. 832p.

タイ国の歴史に関する書籍は数多く出版されているが，それらの中で本書は，タイ族，コーム族，クメール族と3つの民族の相互関係に焦点をしぼって書かれているという点で特色を出したものである。他の歴史関係の本と同じ様に，歴代の王朝を追って説明して行くわけであるが，上記の3民族の関係ということを中心としており，その他の余り関係のない事柄は切りすてるなり，ごく簡単にふれるにとどめるなりして，かなり問題点のはっきりした書物となっている。一方，中心問題に関係ある事柄については詳しく述べているので，相当な大冊となっている。

まず全体を，Ayuthaya王朝以前とそれ以後とに大別する。前者においては，タイ族が中国より南下する以前の状態について略述し，ついでSukhothai王朝に至るまでの3民族の交渉について順を追って説明する。後者においては，Ayuthaya王朝，Dhonburi王朝，Ratanakosin王朝，フランスのカンボジア統治という順序で，3民族の相互関係を説明している。タイ族の南下より近代に至るまでの3民族の交渉史概説とでも呼ぶべきものであろう。駆使している資料も相当な量にのぼっている。クメール族，タイ族というのは一応誰でも知っている民族であるが，コームというのはクメール族と同じもの，あるいは極めて近い関係にある同系統の民族といわれており，タイ族がタイ国に入って来る以前にすでにその地域一帯に居住していたと考えられている。私は歴史について云々する資格はないので，ただ本書でこれらの民族について書かれていることを紹介するに止める。本書によると，コームがタイ族以前から住んでいたクメール系の1民族であるに対して，現在のクメール族（カンボジア人）は，コームと同じものではなくて，タイ族の勢力が広まるにつれて，その地区に住んでいたコーム族との間に出来た民族だとする。私は別にこの考えに賛成も反対もするつもりはないけれども，本書がこういった考えの上に立って，これら3つの民族の関係，交渉について書かれているので，紹介するまでである。もちろん，タイ人によって書かれたものであるから，タイ国あるいはタイ族に最も多くの比重が置かれているが，原則としては，インドシナ全体を捕えて書かれたもので，ラオス，タイ，カンボジア，ベトナム等を全体として扱っている。本書が学問的にどれだけの価値があるか，あるいはどの程度の水準のものであるかは，私には何とも判定する資格はないが，歴史の本として，少くとも，読んで楽しいものであることはまちがいない。

（桂満希郎）